

福祉作文コンクール

障害者と関わること

久慈中学校三年

草野

咲

私は最近、障害についてよく考える。実際

家族や友達に障害を持つている人がいるわけではない。しかし、バスや電車などの公共機関で障害者を見かけると思い出すことがある。

小学校低学年の頃、友達と公園で遊んでいた時の事だ。見た目は私たちより四歳程上の

女の子に

一緒に遊ぼう

と声をかけられた。一瞬驚いたが遊んでいる

と楽しくて特に違和感は感じなかつた。しか

し事件が起つた。暗くなつたから、と私た

ちが帰ろうとすると腕をつかみ、泣き出しつ

離してくれない。私は怖くなり泣きながら無

理矢理家に帰つてしまつた。もちろん、その

の人に聞いてその子は無事、家族と家に帰つ

ていった。後で知つた話、その子は障害を持

ついて特別支援学校に通つていたそうだ。

私はその時も、今も障害者との関わり方がよく分からない。いざという時、どう対応すれば良いか分からない。あの時は、あの子のために私は何かでききたのかもしれない。あの時は、あの子のためには分からなかつた。私はひどいとされ、壁がていて、壁が上手にコントロールできなかつたりする。思うよ

周りより成長が遅かつたのか。それは、壁があると、周りでいいのがもしかしない。しかし、社会に出るために色々な人と交流する学校といふ場で壁を作つていいのか。世の中に一人一人皆違う人がいることを知る場に壁はいらぬいと思う。子供は単純で、特別支援学校といふ変わった響きの学校名、そして自分たちとは何かが違う、という違和感で障害者というラベルを貼る。そしてほとんどのは、きっとその人たちを冷やかな目線で見続ける。小さい頃から学校という壁で区別さ

れてきたからそれが普通だと考える人が大半だと思う。だが、このままでは良いのか。確か
に特別支援学校を無くします、なんてことは
無茶だ。その壁は私たちには壊すことだが難し
い。しかし、建物ではなく一人一人の心の壁
なら壊せるのではないか。小さい頃、まだ純
粹な時に違和感を覚えなければ良いのではな
いが。
私は少しの事でも未来の子ども達の心の壁
を取りはらえると思う。例えば皆で給食を食
べたり遊んだりとたわいのないことでいい。
楽しかった思い出があれば、心の壁があつた
としても薄い壁となるかもしれない。人間、し
かし、少しでも多くの人の心が障害者に対し
て温かいものになれると良い。それは、障害
を持つても持つていなくても誰かの心を
救うと思う。